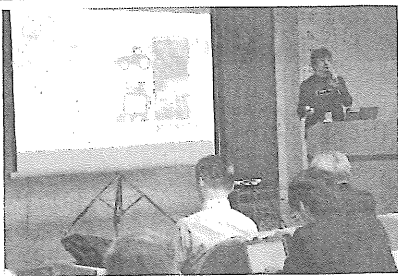


GPSやAR 農業活用へ講演

道農業機械工業会

北海道農業機械工業会は25日、札幌市で農機の技術革新をテーマにした講演会を開いた。農作業支援システムの開発を手

講演する農業情報設計社の濱田代表(25日、札幌市で)



掛ける、帯広市の農業情報設計社の濱田安之代表

が登場し、技術開発動向などを紹介。農機メーカーや研究機関などの関係者ら75人が集まり、拡張現実(AR)技術の農業利用や、低コストな衛星利用測位システム(GPS)ガイダンスシステムの活用などに関心を寄せた。

濱田代表はAR技術の農業分野での利用可能性について、トラクター内にあるメーターパネルやガイダンスシステムの端末が必要なくなる可能性や、農作業の知見の継承や技術指導が効率的にな

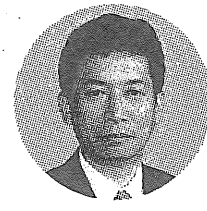
る可能性を指摘。「農業生産で使われる見込みは高い」とみる。

同社で開発したトラクター運転支援アプリ「アグリバスナビ」も紹介。タブレット端末を利用したGPSガイダンスシステムで、市販の製品より低コストで導入できる。

ダウンロード数は4万9000件に上り、9割以上がブラジルやスペインなどの海外だという。高精度なGPS機器の開発などを通じて「世界中の農業機械と農業を変えていく」と話した。

新技術と市場開拓を

来年7月に国際農機展



青柳会長

一般社団法人北海道農業機械工業会（青柳検査長）は、25日午後、札幌市内の札幌全日空ホテルにおいて、毎年恒例の「農業業界新年交礼会」と「新春特別講演会」を開催した。

同ホテル24階の白楊の間で開催された「新春特別講演会」では、農林水産省生産局などを経て独立・企業した、(株)農業情報設計社代表の濱田安之氏が、「農業機械はどう変わるのか（通信制御技術から見た農業機械の技術革新と農業情報設計社の挑戦）」を演題にして講演を行った。

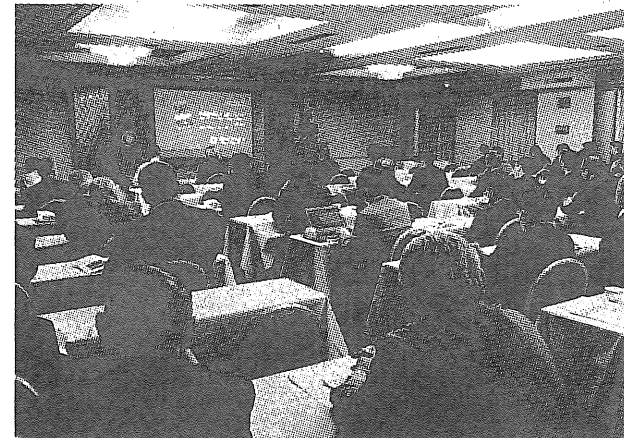
濱田氏は、最近の流れとして、①農業機械の自動化と農業IT/ICTシステムとの融合②ドローンの台頭③AR技術の利用——があり、これら

を束ねるための通信技術とその標準化が必要であるとした。その上で、「ISOBUSのできること」などに触れ、「AgriBus-Connectの持つ可能性（①世界中の農作業データが集まり始めている②作業時期の前後や作業量等のデータから状況予測の想定も③契約栽培・コントラクターの作業確認とガイダンスの一体化によるコストとデータ入力に係る労力の双方を低減可能）」といった幅広い話題に関して話したことから、好評であった。

次副会長は、出席者に謝意を示した後に、北海道新幹線、ノーベル賞受賞、60周年を迎え祝賀会を開催した(株)石村鉄工、「民間部門農林水産研究開発功績者表彰」の農林水産大臣賞を受賞したオサダ農機、「優秀経営者顕彰」で「地域社会貢献者賞」を受賞した(株)土谷特殊農機具製作所といった

明るい話題に触れた後に、4つの台風による被害や「北海道スマート農業フェア」、「セミナー『ミャンマーにおけるビジネスチャンス』」を取り上げた。

その上で、「イノベーションと市場開拓」という大きな目的に向かい、北海道農業機械工業会は、国、道、関係機関と連携を図り、会員とともに歩みたいと思っている。な



農業機械の技術革新など幅広い内容が話された新春特別講演会



あいさつする土谷副会長

続いて懇親会に移り、十勝農業機械協議会会長の山田政功氏が乾杯を行い、4年に一度の農業機械展示会である「第34回国際農業機械展 in 帯広」が、来年7月12日から16までの5日間、前回と同じ北海道帯広市「北愛国交流広場」で開催されることが報告され、本田正一理事が閉会の挨拶を行った。

「内産の機械で対応していきたい」などと、それぞれ挨拶した。

「飛躍を誓った。」

次に、来賓として、経済産業省北海道経済産業局地域経済部次長の中野健氏が「変化やリスクに対応しうる、強い北海道経済を作っていくことが喫緊の課題であり、その重要な鍵の一つが、日本の経済を支えてきたものづくり産業の更なる発展である」などと、道経済産業部産業振興局産業振興課長の三橋剛氏が「生産現場の省力化の機械を、道

場

データの相互通信で効率作業

農業情報設計社濱田氏が講演

(一社)北海道農業機械工業会(札幌市・青柳稔会長)は25日、札幌全日空ホテルで新春特別講演会と新年交礼会を開催した。

講演会では(株)農業情報設計社の濱田安之代表が「農業機械はどう変わるのか」通信制御技術から見た農機の技術革新と弊社の挑戦」と題し講演を行った。濱田氏といえ

ば農研機構でAGポートの開発・推進をした後に設計社の濱田安之代表がベンチャーを設立し、GNSSガイダンスのアプリを開発し5万2千件データをロードされるなど世界で活躍する起業家だ。

冒頭、マイクロソフトのホロスコープ(AR)を装着して登壇した濱田氏は、昨年本格普及したリモートセンシングや農薬散布用途のドローン利用のみならずAR(拡張現実)利用が加速的に増えるだろうと強調しつつ「5年に1度農業I

Tは話題になって廃れていったが、漸く解決策に近いものが出来上がりつつある」と前置。現在の課題として①車両側だけでなく作業機の自動化(作業手順に合わせた車速変更を作業機によるトラクタ制御)が非常に重要②無人化用安全センサーの開発(無人自動車技術の転用待ち)③農業IT/ICTシステムとの高度統合を行う為に無線通信と外部データのやり取りの実現。そして作



新年交礼会

業データの相互交換性を持たせることがあり、その解決は喫緊に行うべきだと話す。その中でデータ受渡しの共通化の規格づくりを米欧のAg Gatewayが組織されておりモンサントなど資材メーカーを加えた百数十社が参画。日本からはクボタや富士通が参加して、国内でも規格づくりを行う為の組織(A L F A E)に入った。「共通化しないと生き残りをかけてくる海外勢に太刀打ち出来ない」と強調する。主導したAGポートについては企業連携の成果で国産トラクタに標準装備され、一定の成果は出たが、

作業機制御・自動化は標準化されておらず限界がありISO-TBUS対応が必要だと話す。

そこから同社の取組を紹介。GNSSガイダンスや自動操舵(開発中)、GPSと車速取出・IS O-TBUS対応を1つのボドで行えるアグリバス

交礼会で土谷令次副会長は「北海道スマート農業フェアの開催やアジア友好指導招聘者事業でミャンマーから2人の要人を招くなどイノベーションと海外市場開拓という大きな目標に向かい関係機関と連携を会員とともに歩みたい」と挨拶

G(開発中)など安価で、何処でも誰でも制度の高産業局の中野健地域経済局の部長と北海道経済部の三橋剛産業振興課長が来るのが望ましい」とし、寶挨拶。その後は乾杯を山田政功十勝農機協会会長の大首領で行った後、締め現に向けて農作業のクラの挨拶を本田正一理事がウド化に向けた基盤づくりを行い、最後は一本締めを行い、会を終了した。

技術革新で市場開拓へ

道農業発展に意欲

北農工農機業界の交礼会開く

北海道農業機械工業会、北海道農機商業協同組合、十勝農業機械協議会3団体主催による「平成29年農業機械業界新年交礼会」が1月25日、札幌市の札幌全日空ホテルで開催された。北海道経済産業局をはじめ、同庁関係部局、試験場、学会、ホクレンなど多彩な顔ぶれが出席。青柳総会長に代わって挨拶した土屋令次北農工副会長は「イノベーションと市場開拓という大きな目標に向かい、関係機関との連携を図って進めていこう」と、更なる北海道農業発展への決意を新たに示した。

主催者挨拶として土谷令次北農工副会長は、昨年に祝賀会を執り行った年の北海道情勢を振り返り、北農工においても会員企業の石村鉄工が昨年11月に創立60周年を迎え

「第34回優秀経営者顕彰」で地域社会貢献者賞を受賞したことも上げて各企業の業績を称えた。また、「昨年11月には

来賓からは経済産業省北海道経済産業局地域経済部次長の中野健氏は「北海道経済産業局の重点の一つとして、一次産業や食関連産業について人手

不足解消、あるいは生産性の向上を図るべくロボットやIoT導入促進について取り組んでいる。こうしたことで道内における食関連産業の競争力強化、モノづくり産業やIT企業の新たな市場創出につながる後押しをしていこう」。

これに先立ち行われた新春特別講演会では農研センター勤務を経て農業情報設計社を起業した濱田安之代表が、「農業機械はどう変わるのか」と通信制御技術から見た農業機械の技術革新と農業情報設計者の挑戦」の演題で講演した（詳細次号）。



挨拶を述べる北農工の土谷副会長

- 1頁：日本農業新聞（1月26日）
- 2頁：農経しんぼう（1月30日）
- 3頁：農機新聞（1月31日）
- 4頁：農村ニュース（1月30日）

広農業機械展の日程が決定したことを報告、改めて協力を求めた。

懇親会では日本貿易振興機構（JETRO）北海道貿易情報センターの関根広亮所長代理、昨年3月に就任したキセキ北海道の小田切元社長がスピーチを行った。

◇

これに先立ち行われた新春特別講演会では農研センター勤務を経て農業情報設計社を起業した濱田安之代表が、「農業機械はどう変わるのか」と通信制御技術から見た農業機械の技術革新と農業情報設計者の挑戦」の演題で講演した（詳細次号）。